琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository

Title	パーカッション・アンサンブルを用いた音楽授業実践の効果 : ブラジルのサンバ・バツカーダを教材とした器楽・鑑賞活動からの考察
Author(s)	岡田, 恵美; 永松, かなえ
Citation	琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 = Bulletin of Faculty of Education Center for Educational Research and Development(25): 11-23
Issue Date	2018-02
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42466
Rights	

国立大学法人
琉球大学
University of the Ryukyus

パーカッション・アンサンブルを用いた音楽授業実践の効果
－ブラジルのサンバ・バツカーダを教材とした器楽・鑑賞活動からの考察－

岡田 恵美*　　永松 かなえ**

The Music Practice in Junior High School using the Rhythm of Brazilian Samba

Emi OKADA　　Kanae NAGAMATSU

0. はじめに

「新学習指導要領」が平成 29 年 3 月に公示された。新しい『中学校学習指導要領音楽編』は，現行の学習指導要領（平成 20 年公示）と比較しても，明らかに記述の分量が増加している。改訂の第一の特徴として，新学習指導要領では表現領域における資質・能力が「思考力，判断力，表現力等」「知識」「技能」に区分され，より詳細に各事項が明示されている点を指摘することができる。例えば，現行の学習指導要領における，「曲想を感じ取り」「楽器の特徴をとらえ」（第 1 学年「2 内容」の「A 表現（2)」より抜粋）という表現は，新学習指導要領では，「曲想と音楽の構造との関わり」や「楽器の音色や響きと奏法との関わり」を「理解する」という明確かつ具体的な文言へと改訂されている。

また第二の改訂の特徴として注目したい点は，新設されている次の事項である。

「歌唱及び器楽の指導における合わせて歌ったり演奏したりする表現形態では，他者と共に一つの音楽表現をつくる過程を大切にするとともに，生徒一人一人が，担当する声部の役割と全体の響きについて考え，主体的に創意工夫できるよう指導を工夫すること。」（新『中学校学習指導要領音楽編』「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い」より 2（4)）

上記の新設事項では，音楽科授業において他者と協働するプロセスや，個々が自身の役割を考えると同時に，他者や全体を意識することによって生まれる調和や音楽表現の価値を重要視していることがわかる。中学校におけるクラス全体での音楽表現と言えば，最も一般的な表現形態は合唱である。合唱祭や合唱コンクールを通して音楽的側面だけではなく，全体練習を通してクラスの一体感が形成されるという一面もある。しかしながら、変声期の男子生徒にとっては，合唱活動に主体的に参与することに対し，苦手意識を抱く者も少なくない。本稿は，こうした中学生の現状や，今回の学習指導要領の改訂の特徴を踏まえた上で，合唱ではなく，器楽合奏という表現形態，それもブラジルのサンバを取り入れたパーカッション・アンサンブルを中学校の授業で展開することによって，生徒達が他者と協働するプロセスや，個々が自身の役割を考え，全体を意識することによって生まれる音楽をどのように価値づけることができるのかを検証するものである。また，ブラジルのサンバのような，特に異文化の音楽（学習指導要領上は「諸民族の音楽」）を扱う場合，今回の改訂の特徴でもあった「思考力，判断力，表現力等」や「知識」と「技能」を授業内で有機的に関連付けるために，鑑賞活動と器楽による表現活動を融合させるこ

*琉球大学教育学部 准教授
**琉球大学教育学研究科 大学院生

とが効果的なのではないかと仮説を立て，この点についても検証する。したがって，本稿の目的は，第一に，異文化である「諸民族の音楽」を題材とした授業において，鑑賞活動と表現活動を融合させることの意義を検証することであり，主に第 1 節で扱う。また第二の目的は，ブラジルの「サンバ・バツカーダ」（サンバ楽器による打楽器合奏）を用いた授業実践を通して，パーカッション・アンサンブルが齎す教育的効果を明らかにすることである。これは第 2 節以降で取り上げる。

1. 中学校における「諸民族の音楽」を題材とした授業法

1.1「諸民族の音楽」を題材とした中学校教科書からの考察

中学校の音楽科教科書において，ここでは沖縄県内で最も採用率の高い教育芸術社の教科書を対象とすると，「諸民族の音楽」に関する教材は，【表 1】で示す通りである。

教科書 （教育芸術社）	「諸民族の音楽」に関する教材 単元「諸民族の音楽に触れ，そのよさを味わおう」 声や楽器の音色，リズム，速度，旋律に注目
『中学生の音楽 1』	鑑賞活動：アジアの諸民族の音楽 ●声楽：オルティンドー（モンゴル），カッワーリー（パキスタンなど） ●器楽：グーチン（中国），タンソ（朝鮮半島） ●日本とアジアの弦楽器・管楽器（口絵写真）
『中学生の音楽 2・3 上』	鑑賞活動：世界の諸民族の音楽 ●声楽：ジンジュ（中国），ヨーデル（スイス） ●器楽：シタール（インド），チャランゴ（ボリビア）
『中学生の音楽 2・3 下』	鑑賞活動：世界の諸民族の音楽 ●合奏：メヘテルハーネ（トルコ），バラフォンの合奏（西アフリカ），ロマの音楽（ハンガリー），マリアチ（メキシコ），ガムラン（インドネシア・ジャワ島） ●世界の祭りや踊り（口絵写真）
『中学生の器楽』	なし

【表 1】中学校教科書にみる「諸民族の音楽」に関する教材

第 1 学年ではアジアの音楽を扱い，第 2 学年以降で世界の諸民族の音楽に発展し，表現形態も声楽や器楽から合奏へと段階的に広がっている。また共通する単元として，「諸民族の音楽に触れ，そのよさを味わおう」という単元目標が掲げられ，いずれも声や楽器の音色，リズム，速度の変化，旋律の音の動きに注目して鑑賞するという学習内容である。即ち，中学校におけるアジアや世界の「諸民族の音楽」に関する教材は，全て「鑑賞活動」の中に位置付けられているのである。言い換えるならば，なぜ「表現活動」がそこには全く取り入れられていないのだろうか。その主な要因は，「諸民族の音楽」で扱われるような楽器が教育現場に所蔵されていないことや，授業者である教員自身にとって馴染みのある音楽ではないことに起因し，視聴覚資料を駆使した鑑賞活動中心の授業や，然もなければ授業では扱わないというような状況も考えられるだろう。こうした状況も鑑み，次項では「諸民族の音楽」を題材とした授業において，鑑賞活動に偏向せず，表現活動と融合させるような授業をなぜ構築していくべきなのか，その意義について考える。

1.2 鑑賞活動と表現活動を融合させることの意義

新学習指導要領では，鑑賞領域における資質・能力として，第一に「思考力，判断力，表現力等」，第二に「知識」が挙げられ，それが【表 2】の右側に示す事項と関係付けられている。

表現領域の器楽分野における資質・能力	鑑賞領域における資質・能力
ア「思考力，判断力，表現力等」 器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，曲にふさわしい器楽表現を創意工夫すること **イ「知識」** （ア）曲想と音楽の構造や曲の背景との関わり （イ）楽器の音色や響きと奏法との関わり **ウ「技能」** （ア）創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法，身体の使い方などの技能 （イ）創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能	**ア「思考力，判断力，表現力等」** （ア）曲や演奏に対する評価とその根拠 （イ）生活や社会における音楽の意味や役割 （ウ）音楽表現の共通性や固有性 **イ「知識」** （ア）曲想と音楽の構造との関わり （イ）音楽の特徴とその背景となる文化や歴史，他の芸術との関わり （ウ）我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と，その特徴から生まれる音楽の多様性

【表 2】新学習指導要領にみる表現領域の器楽分野及び鑑賞領域における資質・能力

即ち，知識を得ることによって思考力等を促し，両者は不可分の関係にある。前項で触れた「諸民族の音楽」の教科書教材においても，各所にて日本の和楽器とアジアの楽器との比較や，日本の長唄や義太夫節と他国の歌唱法との比較を促す文言が見られ，様々な音楽の特徴を理解することから，個々の音楽の共通性や固有性を主体的に生徒達が思考する姿がそこに想定されていることが読み取れる。こうした鑑賞領域における資質・能力と，【表 2】の左側に示す表現領域（器楽分野）における「知識」には共通する部分もあり，両領域における「知識」と表現領域における「技能」とが複合的・横断的に絡み合う授業を展開することが可能となれば，そこにより深い「思考力」を促すことができる。「諸民族の音楽」に関する教材を一例とするならば，鑑賞活動を通してその音楽の特徴を抽出し，更にそれを実践することによって理解が深まり，その音楽が持つ固有性を文化的背景と関連づけて思考する力を育むことに繋がるのではないだろうか。

次節では，こうした表現活動と鑑賞活動を融合させた「諸民族の音楽」に関する教材開発ならびに授業デザインについて提案する。

2. ブラジルのサンバ・バツカーダを用いた音楽授業実践

2.1 パーカッション・アンサンブルの特性

本研究では，表現活動と鑑賞活動を融合させた，「諸民族の音楽」に関する教材開発において，パーカッション・アンサンブルという表現形態に着目した。これは，歌唱や合唱よりも器楽，それも打楽器合奏が学習の導入において効果的であると判断したためである。また本稿の冒頭でも言及したように，音楽科授業の中で個々が自身の役割を認識しながら，他者と協働する過程を経て形成される音楽表現に価値を見出すとき，生徒が異なる打楽器によって異なるリズムを奏でながらも，クラス全体で一つの音楽を生み出すパーカッション・アンサンブルは，当に最適な題材と言っても過言ではない。

更に，パーカッション・アンサンブルの特性として，第一に多少複雑なリズム・パターンであっても，各楽器の打音を模した口唱歌を導入することによって，楽譜やその読譜に必要以上に依存することなくリズムを体感することが可能な点が挙げられる。また第二に，リズムの特徴や奏法に合わせて身体を動かし，簡易な踊りを伴うことができることも，リズムと身体性を意識するという観点からその長所と言えるであろう。こうしたパーカッション・アンサンブルの形態で，尚かつ世界の「諸民族の音楽」の題材となる音楽・音楽文化として，本研究ではブラジルのサンバ・バツカーダを授業実践の対象とし，教材の開発を以下のように進めた。

2.2 サンバ・バツカーダの特徴と教材としての可能性

ブラジルのサンバは，ブラジルに連れてこられたアフリカ系黒人奴隷によるパーカッション・アンサンブルを基盤に，そこに様々なジャンルの音楽的要素が加わって発展した，舞踊を伴う音楽である。リオのカーニバルに代表されるサンバ・パレードは，巨大な山車と華やかな衣装を纏ったダンス・チーム，そして「バテリア」と呼ばれる打楽器隊で構成された各地域のチームが，チームのオリジナルのテーマに沿った総合演出で競い合う祭りである。ブラジルの生活と不可分な祭りであり，サンバ・チームは地域コミュニティの形成・維持において中核をなす役割として機能している。

授業教材としては，映像資料の鑑賞を通し，こうしたサンバやカーニバルがブラジルの社会や生活に密接に根付いた文化であることを理解させると同時に，人々を惹きつけるサンバの特徴的なリズムやサンバ・バツカーダの表現形態を実際に生徒達に体感させることによって，なぜサンバがブラジルの人々を惹きつけるのか，その固有性や価値について思考させる授業を展開する。

サンバ・バツカーダを教材とすることの利点・可能性として，様々な点を指摘することができる。まず 40 人のクラスでも一度に演奏可能なこと，同じリズム・パターンを反復することによって最初は正確にリズムを刻むことが出来ない生徒でも徐々に演奏可能になること，複数の打楽器を用いることによって音色やリズムの違いを意識し易いこと，楽器ごとに異なるリズムを積み重ねることで一つの音楽になることを体感できる点，アピート（サンバ・ホイッスル）の合図に集中することによって全員でリズムを変化させたり，ユニゾンで揃えたりできる点などである。

2.3 サンバのリズムやサンバ・バツカーダを用いた音楽授業教材の開発

「諸民族の音楽」を題材として授業を展開する際に，鑑賞活動だけではなく表現活動も複合的に導入する場合，まず直面する問題はいかに楽器を用意するかという点である。今回は，ブラジルのサン・ヴィセンテ市から姉妹都市を締結している那覇市に寄贈されたサンバの打楽器や，ブラジル音楽の打楽器奏者である翁長巳酉氏の個人所蔵の楽器を借用した。それらを合わせても，スルド 5 台（一人につき 1 本のマセットを持たせ、スルド 1 台につき 2 名を配置，計 10 名），タンボリン 12 個，アゴゴ 3 個，ショカーリョ 2 個であり，40 名のクラスでは楽器数が充分ではない。本研究では，1 クラス 40 名全員が楽器を持ち，クラス全体で演奏することを最初に必要前提条件と考えたため，空き缶 2 つを繋ぎ合わせて，缶内に米を入れて作製したガンザ（シェーカー）を楽器不足分の 13 個用意した。【写真 1】は，授業で使用した楽器である。

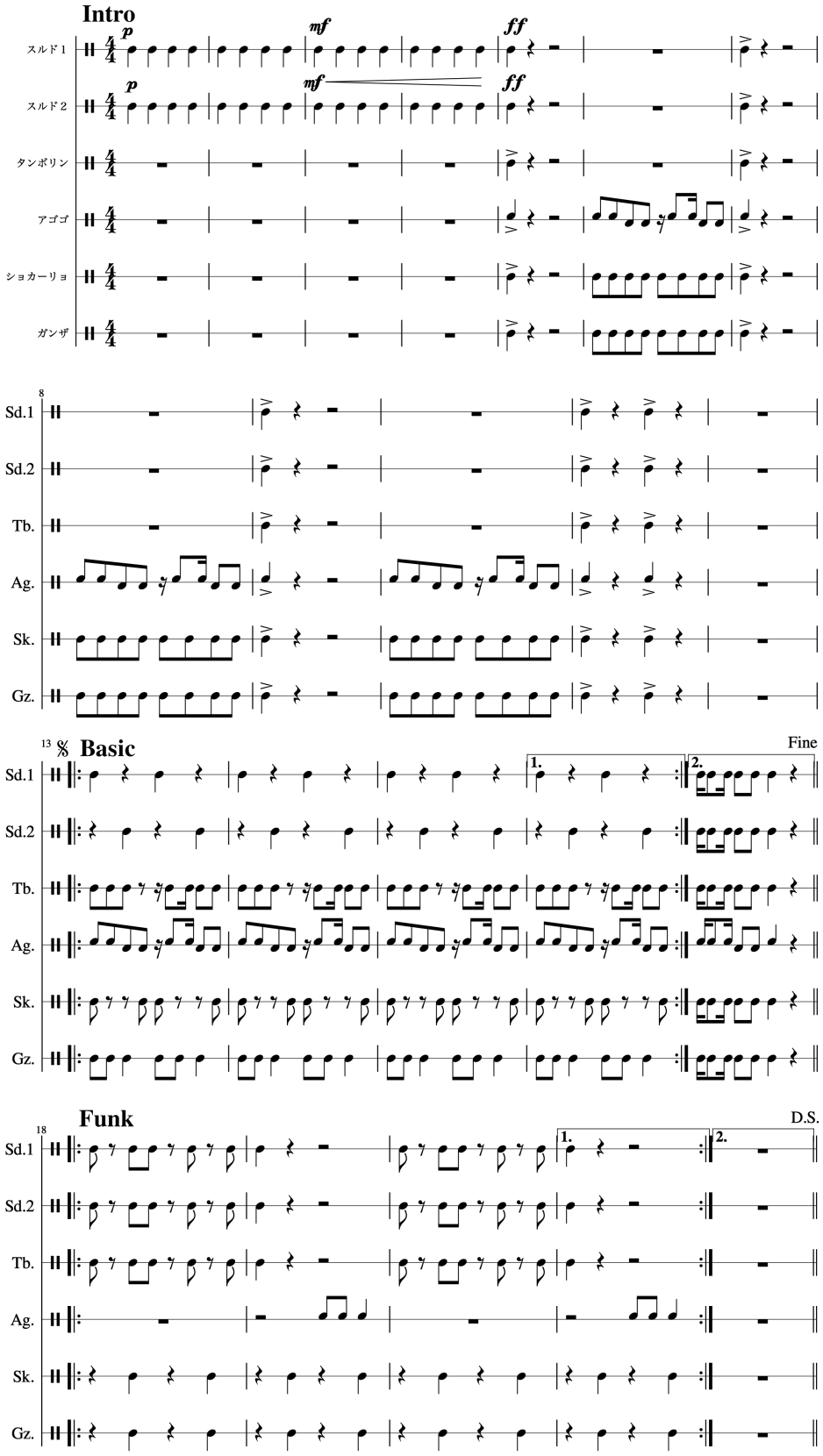
これらの楽器を想定した上で，サンバ・バツカーダの長所を活かした教材として作成したものが，【楽譜 1】（次頁）である。

スルド（ストラップは用いず，床に置いて使用）

（左）アピート，タンボリン，ガンザ，アゴゴ，ショカーリョ

【写真 1】授業で使用した楽器

【楽譜１】**Samba Batucada** 2017 琉大附属中学校 Version　　作譜：岡田 恵美（琉球大学）



このパーカッション・アンサンブルは次の 3 部分，1）イントロ部分（楽譜上では 1-12 小節。以下，Intro と表記），2）ベーシック・リズム部分（13-17 小節。以下，Basic と表記），3）ファンク・リズム部分（18-22 小節。以下，Funk と表記）で構成され，そこで用いられる各楽器のリズムの特徴やそれを採用した意図について説明する。

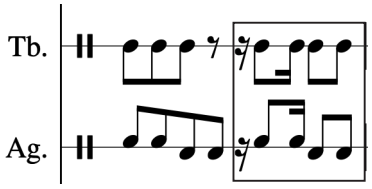
1）Intro における各楽器のリズムの特徴

5 台のスルドによる独奏で始まり，p（ピアノ）から ff（フォルティッシモ）へとクレッシェンドしながら等拍を刻む。5 小節目で全ての楽器がアクセント付けて 1 拍のみ演奏する。その後，次の 6 小節目はアゴゴとショカーリョ，ガンザが 4 拍分を演奏し，再び 7 小節目で全ての楽器が 1 拍のみ演奏し，これらを繰り返した後，アピートの合図で次の Basic に移行する。この Intro では，他の楽器が演奏するリズムを体感しながら個々が拍をカウントしておかなければ，全員で演奏する 5・7・9・11 小節目の 1 拍が合わない。したがって，生徒達が他の楽器のリズムを意識して，自分の担当するリズムを正確に刻むことによって生まれる，全体的な調和ならびに無音と有音との対比を音楽的に表現することを想定してリズムを設定した。

2）Basic における各楽器のリズムの特徴

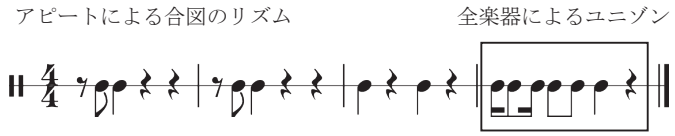
Basic は最もサンバの特徴的なリズムが，タンボリンやアゴゴによって演奏される部分である。スルドは調律の異なる 2 パート（高音のスルドと低音のスルド）に分け，両者が交互に「ガン（高音）」「ゴン（低音）」「ガン」「ゴン」... と正確に等拍を刻み，他楽器のリズムを低音から支える役割とした。ショカーリョとガンザは，スルドのリズムに変化を与える役割として，ショカーリョは「チャ・・チャ」，ガンザは「ズンズンチャ・」と口唱歌を用いてそれぞれのリズムの指導を行う。

Basic でサンバの特徴的なリズムを担うタンボリンとアゴゴは，【譜例 1】のリズムを刻む。3 拍目に見られるシンコペーションと 4 拍目の等拍リズムのコンビネーションが，サンバの特徴的なリズムの一つであり，Basic では両楽器がこれを繰返し演奏する。タンボリンは「ゥタータタッタッ」，アゴゴは「ゥカーカコンコン」という口唱歌を指導に用いる。



【譜例１】サンバの特徴的なリズム

また Basic から次の Funk に移行する時や，演奏を終了する時は，アピートによる合図とハンドサインで指示を全体に伝える。アピートはハンドサイン（今回は，Basic から Funk に移る時は親指と小指のみを立て，演奏を終了する時はグーに握る）と共に，【譜例 2】の 3 小節分のリズムを吹くと，枠で囲んだ部分を全楽器がユニゾンで演奏する。このユニゾン部分にもシンコペーションを含んだサンバの特徴的なリズムが現れている。



【譜例２】アピートによる合図と全体のユニゾン部分

3）Funk における各楽器のリズムの特徴

Funk では，各楽器の役割を Basic とは変化させ，スルドとタンボリンが特徴的なリズムを担う。元来ファンクは 16 ビートで刻むことで独特のグルーヴ

【譜例３】Funk におけるリズム

を生み出すリズムであるが，ここでは【譜例 3】のように，4/4 拍子の 2 小節をワンフレーズとした非常にスローなリズム・パターンで演奏を行う。

ショカーリョとガンザは 2 拍目と 4 拍目のみを担当し，前述の Basic のリズム・パーカッションとは異なる雰囲気を生み出し，アゴゴはフレーズの終わりに装飾的に 2 拍分のみ演奏する。

以上のような 3 部分を教材として用意し，最終的な演奏においては，Intro から始まり、Basic から Funk へ，再び Basic から Funk へという具合に，何度も両部分を交互に繰り返すことによって，リズムの違いや生まれてくる音楽の雰囲気の違いを知覚・感受できるような構成を想定した。次項では，これらを教材として，中学校の音楽科授業の中でどのような授業展開が可能であるか，学習のねらいと指導法について提案する。

2.4 中学生を対象としたサンバ・バツカーダを用いた音楽科授業デザイン

ブラジルのサンバ・バツカーダを教材とした本研究の授業実践は，琉球大学教育学部附属中学校の第 1 学年を対象に，50 分授業を 2 コマ（第 1 時・第 2 時）で実施させて頂くこととなった。表現活動と鑑賞活動を有機的に融合させた授業を，そうした時間的制約の中でいかに展開していくかを考慮し，〔共通事項〕を「リズム」とした上で，指導内容は両活動より下記の【表 3】に設定した。

A 表現（2）器楽	B 鑑賞
ア「思考力，判断力，表現力等」 器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，曲にふさわしい器楽表現を創意工夫すること **イ「知識」** （イ）楽器の音色や響きと奏法との関わり **ウ「技能」** （イ）創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能	**ア「思考力，判断力，表現力等」** （イ）生活や社会における音楽の意味や役割 **イ「知識」** （イ）音楽の特徴とその背景となる文化や歴史，他の芸術との関わり

【表３】本研究の授業実践における主な指導内容（新学習指導要領より抜粋）

単元名は「サンバのリズムの特徴を感じて，サンバの魅力を探ろう」とし，単元目標には，1）サンバのリズムの特徴を知覚・感受している，2）各楽器の異なるリズムを意識し，他者と合わせて演奏している，3）サンバの特徴と文化的背景を理解し，サンバの魅力を味わっている，以上の 3 点を掲げた。各単元目標を【表 3】と対照させれば，単元目標 1）は表現活動の「知識」，単元目標 2）は表現活動の「技能」や「思考力，判断力，表現力等」，単元目標 3）は鑑賞活動の「知識」や「思考力，判断力，表現力等」に主に関連する。だがここで強調しておきたいのは，単純に各活動と各指導目標を切り離せるものではなく，実際には両活動がそれぞれの指導内容・目標に相互作用するような授業展開が必要である。

これを念頭に置き，【資料 1】（次頁）の「音楽科指導案」を作成し，授業展開の詳細は指導案に記載している。ここでは，授業展開の概要を【表 3】の指導内容と再び対照させ，項目ごとに列挙すると次の通りである。

（第１時）主な学習内容と指導内容

A. サンバの音楽やサンバ・カーニバルについて理解させ，学習への意欲・関心を持たせる
［**鑑賞**：知識］

B. サンバのリズムを体感させる ［**器楽**：技能］

C. 演奏の流れについて理解させる ［**器楽**：知識］

D. サンバのリズムの特徴を知覚・感受させる ［**器楽**：知識，思考力等］

E. サンバのリズムの特徴を意識しながら演奏させる ［**器楽**：知識，技能，思考力等］

F. 各楽器の異なるリズムを意識しながら，他者と合わせて演奏させる ［**器楽**：知識，技能，思考力等］

（第２時）

G. サンバの新しいリズムを体感させる ［**器楽**：知識，技能，思考力等］

H.2 種類のリズムの違いを体感させる ［**器楽**：知識，技能］

I. 自身の経験を振り返らせる ［**鑑賞**：知識，思考力等］

J. サンバの特徴や文化的背景を理解させ，自身の経験と繋げて考えさせる ［**鑑賞**：知識，思考力等］

K. サンバの特徴・文化的背景を意識して演奏させる ［**器楽**：知識，技能，思考力等］

第１時の冒頭ではサンバのカーニバルやバテリア（打楽器隊）の映像を鑑賞して，サンバの音楽に関する関心やサンバで使用される楽器を演奏したいという意欲を引き出し，その後に実際の楽器を用いた演奏活動や，リズムの特徴に関して知覚・感受する活動に移行する。第２時の前半は演奏を中心に行って実際の音楽を体験し，サンバの音楽の特徴（楽器やリズム，音の重なり等）を捉えた上で，後半では再び本場ブラジルのバテリアの演奏やカーニバルの映像を追体験させる。即ち，（第１時）鑑賞活動→器楽表現活動→（第２時）器楽表現活動→鑑賞活動→器楽表現活動と，両活動を交互に展開させている点が本授業における活動展開の特徴と言える。

次項では，実際の授業実践から見えた生徒の姿やワークシートの記述を中心に，前述の３つの単元目標と照らし合わせながら考察を行う。

【資料 1】音楽科指導案

1. 指導内容

A 表現（2）	B 鑑賞
ア「思考力，判断力，表現力等」 器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，曲にふさわしい器楽表現を創意工夫すること	**ア「思考力，判断力，表現力等」** （イ）生活や社会における音楽の意味や役割
イ「知識」 （イ）楽器の音色や響きと奏法との関わり	**イ「知識」** （イ）音楽の特徴とその背景となる文化や歴史，他の芸術との関わり
ウ「技能」 （イ）創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能	
〔共通事項〕リズム	

2. 単元名　「サンバのリズムの特徴を感じて，サンバの魅力を探ろう」
3. 教材名　ブラジルのサンバ・バツカーダ
4. 単元目標
　○サンバのリズムの特徴を知覚・感受している

○各楽器の異なるリズムを意識し，他者と合わせて演奏している
○サンバの特徴と文化的背景を理解し，サンバの魅力を味わっている

5. 展開

活動のねらい	生徒の活動・反応	指導者の活動と主な発問
A. サンバの音楽やサンバ・カーニバルについて理解させ，学習への意欲・関心を持たせる	○サンバの写真やバテリアの映像をみる。 「ブラジルのサンバ。」 「リオのカーニバル。」	●鑑賞活動 サンバに関する写真やバテリアの映像を視聴させる。 「サンバとは何か知っていますか？」
	○サンバ・カーニバルの構成要素（音楽・ダンス・山車）や使用楽器について知る。	●カーニバルの構成要素（音楽・ダンス・山車）や楽器を紹介する。（スルド，ショカーリョ，ガンザ，アゴゴ，タンボリン，アピート）
	○学習のルールを確認する。	●学習のルールを確認する。 ・楽器を大切に扱い，アピートの合図で音を止め，授業者の話しを聞くこと
	○担当楽器を持って一列の円形で座る。	●担当楽器を伝え，一列の円形に座らせる。
B. サンバのリズムを体感させる	○スルドから順に Basic を練習する。	●スルドから順に Basic のリズムを指導する。
C. 演奏の流れを理解させる	○アピートの合図で Basic の最後のユニゾンのリズムを演奏することを理解する。	●アピートの合図で Basic の最後のユニゾンのリズムを演奏することを確認させる。
D. サンバのリズムの特徴を知覚・感受させる	○全員で Basic の演奏ができた後，最後のユニゾン部分にあるシンコペーションを用いたリズムの特徴を捉える。	●全員で Basic の演奏ができた後，最後のユニゾン部分にあるシンコペーションを用いたリズムを抜粋し，特徴を知覚・感受させる。
	・等拍のリズムとシンコペーションのリズムとの違いから，シンコペーションのリズムの特徴について考える。	・等拍のリズムを手で叩かせ，そこに教師がシンコペーションのリズムを叩いて重ね，それぞれのリズムの違いについて交流させる。
	・シンコペーションのリズムについて，リズム譜の各音符を見ながら確認する。	・音符で等拍のリズム（A）とシンコペーションのリズム（B）を示し，表拍の連続したリズム（等拍のリズム）に対して裏拍でずれて入って来るリズム（シンコペーションのリズム）であることを確認させる。 「一定の拍が表拍とすると，（B）はその裏の拍からずれて入ってきますね。このように表拍に対して裏拍からずれて入るリズム・パターンを『シンコペーションのリズム』と言います。サンバでは，このシンコペーションのリズムがよく使われています。」
E. サンバのリズムの特徴を意識しながら演奏させる	○シンコペーションのリズムを意識しながら，Basic を全員で演奏する。 ・Intro の練習をする。	●シンコペーションのリズムを意識しながら，Basic を全員で演奏させる。 ・Intro を楽器順に指導する。
F. 各楽器の異なるリズムを意識しながら，他者と合わせて演奏させる	○担当楽器を変えて Basic を演奏する。 ○他の楽器のリズムも意識しながら，他者と合わせて演奏する。	●担当楽器を変えて，Basic を演奏させる。 ○他の楽器のリズムも意識しながら，他者と合わせて演奏させる。 第 1 時終了

	○前時を振り返り，楽器名やリズムについてワークシートに記入する。	●前時を振り返らせ，楽器名・リズムについてワークシートに記入させる。
	○全員で Intro と Basic を演奏する。	●全員で Intro と Basic を演奏させる。
G. サンバの新しいリズムを体感させる	○新しいリズム・パターンである Funk を練習し，全員で演奏する。	●新しいリズム・パターンである Funk を指導し，全員で演奏させる。
	○ Basic の最後のユニゾンのリズムに続いて Funk に移行する練習をする。	● Basic の最後のユニゾンのリズムに続いて Funk に移行する練習をさせる。
H.2 種類のリズムの違いを体感させる	○ Basic と Funk を交互に繰り返し，リズムの対比や雰囲気の違いを体感する。	● Basic と Funk を交互に繰り返し，２つのリズムの対比や雰囲気の違いを体感させる。
I. 自身の経験を振り返らせる	○サンバの音楽を演奏してみた感想をワークシートに記入する。	●サンバの音楽を演奏してみた感想をワークシートに記入させる。
J. サンバの特徴や文化的背景を理解させ，自身の経験と繋げて考えさせる	○サンバの映像を再び視聴してその特徴・文化的背景について知り，サンバの魅力について各自が考え，ワークシートに記入する。	●鑑賞活動サンバの映像（バツカーダやリオのカーニバル）を再び視聴させ，サンバの魅力について考えさせる。 「今までブラジルのサンバを演奏してきましたが，サンバの魅力って何だと思いますか？実際に演奏した経験や学習したリズムの特徴などと繋げて考えてみましょう。」
	○サンバの魅力について考えたことを隣同士で交流し，代表生徒は交流したことを踏まえて考えを全体で発表する。	●サンバの魅力について考えたことを隣同士で交流させ，数名の生徒に発表させる。
K. サンバの特徴・文化的背景を意識して演奏させる	○カーニバルの雰囲気やサンバの特徴を味わいながら，全員で Intro，Basic，Funk を続けて演奏する。	●カーニバルの雰囲気やサンバの特徴を味わいながら，全員で Intro，Basic，Funk を続けて演奏させる。 第 2 時終了

2.5 授業実践からの考察

本研究の授業は，琉球大学教育学部附属中学校の第 1 学年 1 組～ 4 組（1 クラス 40 名）を対象に，2017 年 11 月に各クラスにつき 50 分授業 2 コマ（第 1 時・第 2 時）で実施した。授業者は，岡田と永松の二人である。本項では，授業内での生徒の姿やワークシートへの記述を基に，第一に授業への関心・意欲という側面，第二に前述の 3 つの単元目標に沿って考察を行う。ワークシートは第 2 時のみで用い，その内容は，①サンバで使用される楽器の確認（本授業で使用のスルド，タンボリン，アゴゴ，ガンザ，ショカーリョ，アピート），②サンバの構成要素である，音楽（打楽器隊「バテリア」とその音楽「バツカーダ」）・ダンス・山車の確認，③サンバの特徴的なリズムの確認（【譜例 2】のユニゾン部分），④サンバのバツカーダを演奏してみた感想（自由記述），⑤ブラジルのサンバの魅力について考える（自由記述），以上で構成されている。

●授業への関心・意欲に関する考察

第 1 時の冒頭で「サンバ」に関して知っていることを生徒達に問いかけたところ，TV 等の情報や 2016 年のリオ・オリンピック開会式について言及する生徒が数名いたが，その他は「踊り・ダンス」「カーニバル」等の発言が占め，サンバの音楽やその特徴について具体的に意識したことが無い様子が窺えた。しかしながら，ブラジルの場所を地図で示し，2017 年のリオのカーニバルにおけるバテリアの演奏映像を視聴した上で 6 種類の楽器を順に紹介したところ，各楽器の異なる音色や音の大きさに驚き，興味を示す姿があった。また全員が楽器を手にすると，馴染みのない楽器に対し，すぐに音を鳴らそうと指で弾いたり振ってみたり，同じ担当楽器の生徒

同士で様々な奏法を試行する姿も見られた。これは直ぐに発音することの可能な打楽器の特性でもあり，「叩いて音を出してみたい」という本能的な衝動や素直な関心が，その後の円滑な学習導入に繋がっていると言えるだろう。

●目標 1)「サンバのリズムの特徴を知覚・感受している」に関する考察

第 1 時では，生徒達に楽器を持たせた後，Basic の部分をスルドから順に口唱歌を用いて授業者が奏法を実演しながら指導した。スルド担当の 10 名のリズムが揃ったところで，ガンザ 13 名にリズムを指導してスルドのリズムに重ね，同様にショカーリョ，アゴゴ，タンボリンと順々に音を重ねていった。その後，演奏の終了の仕方として，授業者のハンドサイン（手をグーに握る）と共に【譜例 2】で示したアピートの合図を示し，ユニゾン部分を数回練習した。ユニゾン部分にシンコペーションを含んだサンバの特徴的なリズムが現れていることを，授業者がリズム譜を用いて説明し，等拍のリズムとユニゾン部分のリズムとを比較しながら手拍子で確認を行った。

サンバのリズムの特徴に関して，ワークシートの記述では，「シンコペーションでそれぞれの音が生きているなと感じました」「裏拍が感じられる」「裏拍をいいように使っている」と知覚した様子や，「だんだんやっていくにつれて日本にはないブラジル独特のリズムを自分の体で感じることができた」「リズムが普段勉強している音楽とは違って難しかったけど，慣れたら楽しかった」と比較的な視点からリズムがもつ固有性に触れる記述も見られた。また，こうしたリズムから「リズムが鮮やかに聴こえる」「明るくて盛り上がれて元気になる」「リズムが軽快で明るい気持ちになれる」「リズムがのりやすいから自然と体が揺れた」と感受が促された様子も窺えた。

●目標 2)「各楽器の異なるリズムを意識し，他者と合わせて演奏している」に関する考察

本授業での演奏時は，クラス全員がそれぞれを見渡せるように，机・椅子を教室外に移動させ，教室内に大きな一列の円形を作り，アピートで合図を送る授業者が円形の中心から指導を行った。生徒達は当初，自分の担当楽器のリズムのみに注意が向き，自分の楽器を見つめながら演奏する生徒が多かった。だが，演奏終了のタイミングをアピートの合図で合わせることや，Intro を練習する中で，他楽器の音や他の生徒の動き，アピート担当の授業者への視線など，様々なところへと注意を向けながら，「他と合わせる」ことを意識し始める生徒が徐々に見られた。したがって，何度も同じリズム・パターンを反復する中で，まずは「担当のリズムを正確に刻む」，次に「同じ楽器でリズムを揃える」，その後に「他楽器のリズムを意識して全体で合わせる」という段階的な学習が，個々の内部で生じていたことがわかる。ワークシートでは，「スルドで低音は大切だなと思いました」「ガンザはリズムを整えていて，他の楽器にも色々な役割があったので，終わった後，達成感があり楽しくできた」「脇役の楽器がない」というような各楽器のそれぞれの役割を認識している記述や，「ちがう音の楽器でちがうリズムだったけど，それを合わせることで一体感がありました。体もリズムにのることでさらに楽しく演奏できました」「他のリズムと重なっていくことで複雑で面白いリズムになることが分かった」「途中から別の楽器が入ったり，みんなで合わせる所と別々でやる所があったりした所がおもしろかった。それぞれの楽器が独特の表情を見せていた」など，異なる音色の楽器で異なるリズムを重ね合わせることを意識し，そこに面白さを感じたという記述は非常に多く見られた。

また，「ピッタリ音楽が止まるのが楽しかった」「それぞれの楽器のリズムと音が重なり合い，クラス全員の心が一つになり最後まで楽しく演奏できた」「初めて使った楽器で演奏してみて，みんなの団結力がでました」「サンバ独特の音楽がクセになりました。4 組の団結力で良い意味で盛り上げられたので楽しかった」と，演奏を通して全員の団結力や一体感を感じたことに言及

するものも複数あった。これは，パーカッション・アンサンブルの特性や，アピートの合図に全員が集中することによってリズムが展開していくサンバ・バツカーダが齎す効果とも言えるだろう。同時に，隊列ではなく一列の円形で全員が全員の表情や動きを見渡せる演奏形態も，一体感を作り出す上で作用したと考えられる。

●目標 3)「サンバの特徴と文化的背景を理解し，サンバの魅力を味わっている」に関する考察

サンバの特徴と文化的背景に関しては，映像で視聴したカーニバルに関して，「歌・山車・ダンスもついているので，本物のブラジルのは迫力があったし（準備に）1 年もかかるわけだなと思った」「サンバ（カーニバル）はブラジルの人たちにとって大切で 1 年に一回のとても楽しい行事なのかと思いました。600 名近くもみんなで団結して楽しめることがスゴイ」というような記述や，生徒達が体験した演奏を踏まえて，「地域のつながりを深めるためだと思う！みんなでやった時も協力し合いながら，（演奏を）合わそうとしていたから。」「それぞれの地域の人たちがより集まって一緒に踊り『楽しい』という所だと思います。サンバでは何かうきうきする感じができるところも魅力」とブラジルの人々にとってのサンバの意味を思考する記述もあった。その他には，「日本のぼんおどりとかそういうのと似たような感じでやっていると思った」「沖縄でいえばエイサーみたいな伝統行事なんだと思います。みんなで楽しくリズムに乗っていて良いなと思いました」と身近な例と比較しながら伝統行事として捉える意見や，「植民地時代に働いていた原住民（原文ママ）がつらさをやわらげるために，陽気な音楽で踊っていたんだと思う」とその由来に言及する生徒もいた。こうしたブラジルのサンバやカーニバルの文化的背景を踏まえて，その魅力について自身の経験と絡めながら「複数の打楽器でリズムをとってシンコペーションもやってみてピッタリあった時すごく迫力を感じたし，おもしろくてサンバってこういうものなんだって分かりました」「団結して一体感のある演奏になるのがサンバの魅力。だれもが，いつの間にかリズムにのることができて，たくさんの人が楽しみ仲良くなることができるから。体が勝手に踊りだす感じ。」「サンバの魅力は特徴的なリズムだと思う。みんなで合わせて作っているので少しでも乱れたらきれいな音楽にならないと思うから。みんなで力を合わせるものだ。」「一人一人が役目を持つからみんな主役」という意見や類似した記述が非常に多く見られた。

その他には，「おどりながら演奏できたのでおもしろかった」という記述に代表されるように，授業内でも生徒達が全身を使ってリズムを感じている姿が見られた。演奏が安定してきた時に，生徒達に左右にステップを踏みながら演奏するように指示すると，自然に低音のスルドのリズムに合わせて動きながら，自身のリズムを演奏するようになった。生徒自身は無意識であったかもしれないが，この動きによって全体のリズムの縦のラインが整い，特に裏拍の音が格段に揃うようになった。また動きを伴うことによって，他の生徒と時折目を合わせ，笑いながら楽しそうに演奏する姿がよく見られ，これは他者とともにアンサンブルすることの楽しさを，全身で感じ取っている姿であったと考えられる。次節では，これらの授業実践からその教育的効果や教材・指導法の有効性について整理する。

3. 授業実践から見えた教育的効果ならびに課題

本研究では，「諸民族の音楽」に関する教材開発において，パーカッション・アンサンブルという表現形態に着目し，ブラジルのサンバ・バツカーダを教材とした。授業実践の冒頭でも見られたように，打楽器の特性から「叩いて音を出したい」という関心が，その後の学習への意欲や円滑な学習導入に繋がったと言えるだろう。また新学習指導要領の新設事項で言及されているように，音楽科授業の中で個々が自身の役割を認識しながら，他者と協働する過程を経て形成される音楽表現に価値を見出すとき，前述の生徒の姿やワークシートの記述でも見られたように，異

なる楽器によって異なるリズムを重ねながら一つの音楽を生み出すサンバ・バツカーダは非常に効果的な教材と考えられる。他者の動きや他楽器の音色やリズムを全員が意識して合わせようとすることや，アピートの合図に全員が集中することでリズムが展開する形態によって一体感が生まれ，それが達成感や音楽的行為の楽しさ・面白さに繋がっている。最初はリズムを正確に演奏することが難しいと感じた生徒においても，口唱歌を用いた指導や同様のリズム・パターンを何度も反復するというサンバの特徴によって段階的な学習が可能な点や，リズムに合わせて身体を動かし，リズムと身体性を意識できる点もその利点である。

また，今回のように「諸民族の音楽」を教材とした場合，表現活動と鑑賞活動を相互に関連させることによって，音楽の特徴や文化的背景を自身の体験した表現活動と絡めて「思考する」ことが助長されていることがわかる。したがって，「諸民族の音楽」を題材とした授業においても，鑑賞活動に偏向するのではなく，こうした表現・鑑賞活動を一体化させた教材の開発は今後探究されるべきである。更には，今回は時間的制約もあり断念したが，時数に余裕があれば，本研究の授業実践の表現・鑑賞活動に，新たに創作活動を加えていくことも効果的であろう。

謝辞

本授業を実施する前段階としてブラジル・サンバの基礎的なリズム・パターンや楽器奏法について筆者らに御指導頂いた打楽器奏者の翁長巳酉氏，また授業の機会を頂いた琉球大学教育学部附属中学校の金城園美先生に御礼申し上げます。今回授業で使用した楽器の多くは，ブラジルのサン・ヴィセンテ市から姉妹都市を締結している那覇市に寄贈されたものであり，教育目的で借用をご快諾くださった那覇市総務部平和交流・男女参画課に感謝申し上げます。

参考文献・参照ウェブサイト

小原光一他（2017）『中学生の音楽 1』『中学生の音楽 2・3 上・下』『中学生の器楽』教育芸術社。

田島正浩，細川江利子（2017）「リズムダンスのサンバの学習指導に関する研究―教員養成系 G 大学での授業実践を通して―」『日本女子体育連盟学術研究』第 33 号，pp.55-71.

文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説音楽編』（新学習指導要領解説平成 29 年 3 月公示）

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説音楽編』（学習指導要領解説平成 20 年 9 月改訂）

文部科学省「新学習指導要領（平成 29 年 3 月公示）中学校学習指導要領解説」（2017 年 11 月 30 日閲覧）http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387016.htm

McGowan, Chris（2008）The Brazilian Sound: Samba, Bossa Nova, and the Popular Music of Brazil. Temple University Press.